

# 学び合いのある授業づくり

## — かかわり合いを大切にす実践 —

学習開発コース (11220905) 小林 健太郎

本研究は、学び合いを通して、子ども達の人間関係を豊かにし、かつ学力を向上させることについて先行研究と授業実践から考察したものである。学び合いのある授業が豊かな人間関係と学力の向上につながるのではないかと考えた。そのために、学び合いのある授業を行うための手立てを明らかにした。これをもとに、教職専門実習Ⅱで行った授業をふり返った。学び合いのある授業づくりでは、協同的な学びの考え方と手法、そして教師の役割や子ども達の活動内容、授業形態を工夫することが大切であるとわかった。

[キーワード] 人間関係, 学び合い, かかわり合い, 聴き合う, 協同的な学び

### 1 問題の所在と方法

#### (1) 問題の所在及び研究の背景

文部科学省(2011)によると、平成13年度に全国の小学校における不登校児童数は26,511人と過去最大の人数である。平成13年度をピークに不登校児童数は徐々に下がり、平成22年度の調査では21,675人となり、一見、減少したかのように見える。しかし、不登校児童数のみでなく、全児童数そのものが減っているため、[不登校児童数/全児童数×100]としたときの出現率は0.04%の減少しかない。「不登校」は現在でも学校現場で大きな問題となっている。

本研究を考えるきっかけとなったのが、この「不登校」問題であった。同上の文部科学省の調査では「不登校になったきっかけと考えられる状況」についての調べもあり、平成22年度の結果では、「学校に係る状況」が全体の26.4%となっている。その中でも「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が全体の10.8%、次に「学業の不振」が6.5%と多い。

この調査から、不登校のきっかけには友人関係をめぐる問題と、学業の不振が大きく影響しているといえる。日々の授業の中で、人間関係を豊かにし、学業の向上をはかることで不登校の問題の改善につながるのではないかと考える。では、どのような授業を行えばよいのだろうか。

ここで考えたのが「学び合い」である。「学び合い」や「かかわり合い」のある授業において、人間関係を豊かにすることと、学習意欲を向上させることは一体になっているのではないかと考え

た。よって、本研究では「学び合いのある授業」について明らかにしていきたい。

#### (2) 研究の目的

本研究は、学び合いのある授業づくりについて、子ども達の人間関係と学力向上の視点から考察することが目的である。そのために、先行研究から「学び合いのある授業」や「かかわり合いのある授業」の理論と方法を探る。更に、学び合いという視点から自分自身の授業内容をふり返り、考察することで、自分の授業の達成度を明らかにする。

#### (3) 研究の方法

次のような方法で行う。

はじめに、学び合いやかかわり合いのある授業の理論と方法について、先行研究や学校の実践に学ぶ。その実践の中から具体的な授業の姿を探究する。それをもとに、「学び合いのある授業の要素」を表にまとめる。

次に、この表を活用し、実際に自分が行った授業をふり返る。

最後に、ふり返りをもとに、今後の課題と授業づくりの在り方について考える。

### 2 先行研究の検討

#### (1) 「学び」と「学び合い」について

佐藤(2006)は、学び合いを成立させる以前の「学び」そのものについて、「学びとは、対象(教材)との出会いと対話であり、他者(仲間や教師)との出会いと対話であり、自己との対話である。」と述べている。対象(教材)と自己だけでなく、仲間や教師である「他者」という存在との出会いと対話

が重要な点であると考える。

また、「学びとは、本来的に協同的であり、他者との協同にもとづく『背伸びとジャンプ』である。」とも述べ、高いレベルの授業内容を設定することが大切であるとしている。

それとともに、授業スタイルについては、「一斉授業」から「協同する学び」へと変えていかなくてはならないことも述べ、筆者がこれまで考えていたような授業のあり方は見直し、改善していく必要があることが明らかとなった。

授業では、一人残らず参加できるよう、下の層の子どもの問いを授業の中に取り込むことが必要で、そうすることで、上の層の子どもの学びも、下の層の子どもの学びも成立する「協同的な学び」になることもわかった。

佐藤(2006)は、協同的な学びの方法として、小グループによる学びをあげている。協同的な学びにおける学びの主体は、あくまでも個人であり、グループ活動での一体化を求めるのではなく、個々人の考えや意見の多様性を追求することが大切であるとしている。

また、聴きあう・学び合う関係を育むためにも、協同的な学びは大切であると述べている。協同的な学びについては、「教えあう」という一方的な関係ではなく、「聴きあい、学び合う」相互的な関係を成立させなければならないという。

筆者がこれまでイメージしてきたグループ活動と形態こそは似ているものの、考え方や活動内容は異なるものであった。

「協同的な学び」の考え方からもわかるように、授業において、「学び合い」や「聴き合う」ということは大切なことであり、理論と方法を同時に考えながら実行することが重要であると考える。

## (2) 「学び合い」、「学びの共同体」の実践校

### ①大崎上島町立大崎上島中学校（広島県）

大崎上島町立大崎上島中学校では平成 23 年度の公開研究会で「すべての生徒に学びを保障する～学びの共同体を通して～」という研究題目を設定し、学びの共同体の実践を行った。

公開研究会当日には佐藤学はアドバイザーとして助言・指導を行っている。研究の具体的な手立てとしては、全教科の授業の流れの中で「個人作業の協同化」と「背伸びとジャンプのための問題」を意識し、すべての授業内で最低2回の小グループ学習に取り組んでいた。

また、学びのルールとして、子どもの「わからない」を共有したり、聴き合うことを意識したりするように決めていた。授業形態はコの字型の机の配置をして、グループの形態は男女混合の3~4人を徹底している。

同校の学校便りによると、9月に行われた基礎基本学力調査では、国語、数学、英語のすべてが県の平均を上回っていた。上島中学校においては、学びの共同体、協同的な学びは学力の向上に良い影響を及ぼしているといえる。

### ②五泉市立川内小学校（新潟県）

五泉市立川内小学校では平成 18 年度・19 年度に「学び合いで確かな学力をつける学習指導」という研究主題で校内研究を行った。「学び合い」のある子どもの姿として「自分の考えをしっかりと持ち、お互いの思いや考えを理解し合い、尊重し合いながら交流する中で、理解や思考・判断を深め、より確かな知識を獲得していく子ども」としている。また、「学び合い」のプロセスとして、「考える」「伝え合う」「気付く」「検討する」「まとめる」の5段階に分けている。このプロセスについて、川内小学校は、「学び合い」が形成されるためには、子ども達が学習課題に対し、解決に見通しがもてるようにすること、個々の考えを他者との交流を通して追加や修正を繰り返しながら深め、共有化し、それをまとめるという一連の過程を示している。更に、18年度の校内研究を通し、19年度の校内研究計画では、学びあうためには「自分の思いや考えをしっかりと伝えること」、「相手の思いや考えを理解しようとすること」が学び合いにおいて大切であると明らかにしている。

## 3 実践と結果

### (1) 「学び合い」について

先行研究の検討から「学び合い」とは、「自らの課題を解決するために、互いにかかわり合いながら、考えを深めていくことにより、より豊かな学びが生まれる」と捉えた。これをより具体的に述べているものが、先行研究で紹介した、五泉市立川内小学校の学び合いのとらえ方である。①自分の考えをしっかりと持ち、②お互いの思いや考えを理解し合い、③尊重し合いながら交流する中で、④理解や思考・判断を深め、より豊かな知識を得ていくというものである。筆者はこれを「目指す学び合いの具体的な姿」として捉えることに

した。

## (2) 学び合いのある授業

学び合いのある授業における子どもの姿について、(1)により、4つのポイントを考えた。①自分の考えをしっかりと持つこと、②相手の考えを理解すること、③相手を尊重すること、④理解や思考・判断を深められることである。①から④のそれぞれについて、「教師の役割」、「活動内容」、「授業形態」と具体的な姿を考えた。まとめたものが表1である。

表1 学び合いにおける子どもの姿とそのための手立て

手立て 子どもの姿	教師の役割	活動内容	授業形態
①自分の考えをしっかりと持つ	適切な課題の提示、 机間指導	考える、書く、 読む	個人作業、 グループ学習
②相手の考えを理解する	場と時間の保障、つなぐ(明確にする・言い換える)、 もどす	伝える・聴く、 話す、考える、 見る	ペア学習、 グループ学習、 全体学習
③相手を尊重し合いながら交流する	聴く、 理解する、 つなぐ	聴き合う、 一緒に考える、 認め合い良さを伝える	ペア学習、 グループ学習、 全体学習
④理解や思考・判断を深められる	つなぐ、 もどす、 まとめる	聴く、書く、 考える、 まとめる	個人作業、 ペア学習、 グループ学習、 全体学習

## (3) 授業のふり返り

教職専門実習Ⅱにおいて、山形市立A小学校第4学年(26名)で実施した算数の授業をふり返る。

単元は「計算のやくそくを調べよう」の応用部分である。本時の目標は、「ドットの数の求め方をまとめたり移動させたりするなど工夫して考え、1つの式に表すことができる。」である。

指導案の学習活動の過程は次の通りである。

- 1, 場面を理解する。
- 2, 解決の見通しを持ち、課題をつかむ。
- 3, 自力解決をする。
- 4, 考えを交流する。
  - ・グループで交流する。
  - ・全体で交流する。
- 5, 練習問題を解く。
- 6, 学習をふり返る。

子ども達が①自分の考えをしっかりと持つために、

学習活動の1では、絵を入れた問題を提示した。学習活動の2では、課題を黒板に書き、口頭でも確認と説明を行い、課題の提示を工夫した。この時、ドットを囲むだけではなく、移動させたいと考えている子どももいた。ドットを囲むだけではなく、移動してもよいことを全員で共通認識した。学習活動の3では、自力で解決できるように、個人作業にし、ワークシートを活用した。子ども達は、ドットの囲み方や移動の仕方を考え、図と式に表していた。しかし、この場面では、算数の苦手な子どもにばかり目を配ってしまったため、一人ひとりが考えをしっかりと持つことができているのかを把握しきれなかった。一人ひとりがどのように理解し、進んでいるか、作業をしているかを把握するために、机間指導のねらいや方法について学んでいきたい。

また、①自分の考えをしっかりと持つことが、学び合いのある子どもの姿の②、③、④にも関わってくる。一人ひとりに「考えをしっかりと持たせる」ための手立てが必要である。

子ども達が②相手の考えを理解するために、学習活動の4ではグループ学習と全体学習の二つの授業形態をとった。特にグループ学習は時間を多くとり、考えを理解するための手立てを意識できた。子ども達の活動は話す姿勢より聴く姿勢が強く、相手の考えを理解することは出来たと思うが、相手に考えを伝えることに対しては消極的であった。伝える側と聴く側が成り立って、はじめて、相手の考えを理解することが出来る。考えを伝えること、聴くことのどちらも意識した授業づくりを目指したい。

グループ学習の次に、全体での交流を行った。各グループの中から一つずつ代表となる考えを選び、その考えを全員で共有した。この際、子ども達の考えをつなぎ、まとめることを意識しながら行ったが、納得するようなつなぎ方、まとめ方にはまだまだ課題が残った。しかし、筆者が子ども達の考えを適切につなげなかったにも関わらず、子ども達の中で「A班とB班のドットのまとめ方が同じだ」とか「C班とD班のまとめ方が似ている」といった言葉が出ていた。このことから、子ども達自身で学び合おうとする力があることもわかった。現段階の筆者にとっては、表1の手立てを丁寧に授業に取り入れることで、学び合いのある授業に近づけるのではないかと考える。

今回の授業では、②相手の考えを理解すること、③相手を尊重しながら交流することがあいまいになってしまった。子ども達が③相手を尊重しながら交流するために、学習活動4ではどのような手立てが必要だったのだろうか。今後の授業では、グループを中心とした授業形態をとりながら、聴き合う、一緒に考える、認め合い良さを伝える活動を取り入れていきたい。

また、「相手を尊重しあいながら交流する」ことは、学習面だけでなく、人間関係を豊かにすることにも繋がると考えている。普段から人間関係を豊かにすることを大切にすることが、授業中の子どもの学びの姿に反映するのではないか。

子ども達が④理解や思考・判断を深めるために、学習活動の5、6では授業形態を個人学習に戻し、練習問題を解く活動と学習を繰り返す活動を取り入れた。学習活動の1から3を通して考えをしっかりと持ち、学習活動の4で他者の考え方も取り入れ理解し、それを活用し問題を解く学びの集大成である。子ども達は自分が持っていた考えを他者の考えと擦り合わせ、より思考や理解を深めていく。そのためにワークシートを活用した。その結果、子ども達は、よく考え、書いて表すことが出来た。この場面で、まだ疑問に思う所があれば隣の友達に聴くことが出来るような環境づくりが大切だと考えている。

また、ふり返りを書かせる際には、自分自身の気付きや友達とのかかわり合いの中での気付きに目を向けさせた。学び合いを通して自分の学びの深まりや高まりをどれだけ気付くことができるか、ふり返りの中で感じ取らせたい。

#### 4 考察

学び合いのある授業とは、子ども達が「自らの課題を解決するために、互いにかかわり合いながら、考えを深めていくことにより、より豊かな学びが生まれる」ことだとわかった。

そのために、学び合いのある授業における4つの子どもの姿を大切にし、それぞれの手立てを意識して授業づくりをすることが大切である。

また、日ごろの人間関係も大切で、特に聴き合う関係づくりが必要であることがわかった。

#### 5 到達点と課題

##### (1) 研究に対する達成度

本研究を通して、学び合いについて、あいまいだった考えをまとめることができた。また、先行研究による理論と方法の検討と自身の授業を振り返るといった研究を進めるにつれ、筆者の授業観が、授業内容や進行速度を「下の層に合わせたい」という考えから、「子ども達全員」の学びを保障したいという考えに変わった。この授業観の変化は今回の研究の中でも大きな成果だったといえる。

##### (2) 課題

筆者が実習で行ってきた授業は、理論的な考えが定まっておらず、「学習の遅れ気味な子どもに合わせたい」という自分の勝手な思いと考えだけで進めてきてしまった。特に、教職専門実習Ⅰでは、ほとんどの子どもの学びに目を向けられず、遅れ気味の子どものみに合わせてしまった。また、教職専門実習Ⅱでもペア学習やグループ学習を取り入れることが目的化してしまい、「学び」や「学び合い」を保障する視点には立てなかった。学び合いを通して、全ての子どもに学びを保障する授業づくりを今後も考えたい。

#### 引用・参考文献

五泉市立川内小学校

『平成18 校内研究計画』、『19年度 校内研究』  
<http://kawachi.muramatsu.ed.jp/kenkyu/18/kenkyuu18.pdf>

<http://kawachi.muramatsu.ed.jp/kenkyu/19/kenkyuu19.pdf> (最終閲覧日 2012年1月30日)  
文部科学省初等中等教育局児童生徒課

『平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について』

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/23/08/\\_icsFiles/afieldfile/2011/08/04/1309304\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afieldfile/2011/08/04/1309304_01.pdf) (最終閲覧日 2012年1月30日)

大崎上島町立大崎上島中学校

『平成23年度 教育研究計画』、『上島中だより19号』

<http://www.town.osakikamijima.hiroshima.jp/jh/22-manabi/koukaiken-annnai/koukaiken-annnai.html>

<http://www.town.osakikamijima.hiroshima.jp/jh/11-tayori/9-19.pdf>

(最終閲覧日 2012年1月30日)

佐藤学：『学校の挑戦 - 学びの共同体を創る』、小学館、2006